

經濟論叢

第七十四卷 第四號

- マルサス・リカアド研究の意義と問題……岸本誠二郎 (1)
- 中國貨幣史の特質……………穂積文雄 (11)
- 經營とその形態……………小島昌太郎 (35)
- H・P・エギラス著
イスパニヤ農産物價格政策……………有富重尋 (46)
- メアリー・ノーリス著
當面するアメリカの經濟恐慌について…中西健一 (52)
- J・ニヒトヴァイス著
「東ドイツ農業における再版農奴制といわゆる
資本主義發展のプロシヤ型の道の問題」…山口和男 (59)
-

[昭和二十九年十月]

京都大學經濟學會

マルサス・リカアド研究の意義と問題

岸 本 誠 二 郎

従来果されたマルサス・リカアド研究は、經濟學史の研究の上において特に多いであろう。しかもマルサス・リカアドは研究しつくされたのでなく、今日更に改めて研究することが必要とされている。それはイギリスにおけるリカアド全集の完成によつて未發表の資料が發表されたことによるばかりではなく、新しく研究すべき問題があるからである。十九世紀前半におけるリカアド經濟學の祖述ならびに批判やマルクスの批判は別としても、十九世紀終頃からのアシュレー、マーシャルなどのリカアド論以後の研究史を顧みると、リカアド經濟學に關する研究は詳細である。しかしそれらは多くは部分的であり、それ自身としての研究である。マルサスに關する研究はその人口論に關するものが多く、經濟學に關するものは比較的少なかつた。マルサス經濟學はいわば無視されていたのである。

今日マルサス・リカアド研究において求められるのは、第一にこれらの經濟學はその時代の社會經濟史的背景のうちにかなる成立根據を有するであろうかということである。それぞれの經濟學がもつ理論構造を明らかにする

以上に、それがいかなる現實的根據を有するかということが追求される。これは戦前からのアダム・スミス研究の發展でもあろう。

第二に、マルサス・リカアドの經濟學を現代の立場から把握することである。それぞれの時代はそれぞれの問題意識をもつ。現代の立場というのは資本主義廢類期、成熟資本主義における問題意識の觀點である。マルサス・リカアド研究史もこの觀點から改めて検討されることにならう。もとよりこれは第一の研究とも密接に關連する。

マルサス・リカアド經濟學がこのように研究されることは、それが當時の時代に對し、且つ現代に對してもつ歴史的意義を明らかにすることになる。このような研究は古典經濟學研究とも重要な關連をもつ。二三の著しい點を指摘して見よう。

第一に、從來スミスとマルサス・リカアドの經濟學をもつて、一を生産論中心の經濟學、他を分配論中心の經濟學とし、ここに古典學派について二つの段階のあることを認める考え方が行われている。そして更にジョン・ステュアート・ミルは兩者を綜合した第三段階のものとも考えられている。

例えばベックについて見ると、彼は次のように説いた。——古典經濟學を二つに分つ、アダム・スミスによつて代表される初期古典主義で、ここでは生産經濟學へ最も著しい貢獻がなされた。それから主としてリカアドにより、第二次的にはマルサスによつて代表される後期古典主義で、この場合の主たる問題は價值と分配であつた (H. W. Peck, *Economic Thought and its Intellectual Background*, 1935, p. 83)。

問題提起と研究の重點のおきどころについて表面的に見るならばこのような段階を考へて差支えないが、しかしこれにより古典經濟學が古いものをすてて新しいものに變質し改められたのでなく、スミスの生産論が發展され

増築されたのである。リカアドは分配論に多くの説明を費したが、そのために生産論を無用化したのではない。むしろ價值論を詳論したことは生産論そのものの發展である。リカアド經濟學も生産論から出發することはスミスの場合と異なるところはなく、それこそ古典學派經濟學の特質である。リカアド經濟學が社會主義諸思想の想源となつたのは、それが單純に分配論の經濟學であつたからでなく、勞働價值説を貫かんとしてゐるからである。マルサスでは生産論と價值論との關係が弱くなつたが、ジョン・スチュアート・ミルに至り生産論が價值論と切離され單純な技術論として扱われ分配論と並置綜合されたことは、古典理論としてはむしろ墮落である。これは現代の立場からして特に注意しなければならぬ點である。

堀教授はマルサスにおける生産論の重要性を説かれて、少くともマルサスは生産論を輕視しなかつた、というよりも寧ろ、彼は積極的に生産論に重きをおいた、と結論することができると思う、と述べられている(堀經夫、マルサスとリカアドウ、(舞田教授還曆記念論文集(1)古典學派の生成と展開、一五七—一五八頁)。

内田義彦教授は古典經濟學におけるスミス、リカアド、ミルの三つの段階を、産業資本の成立、發展、矛盾の段階として説かれる(内田義彦、經濟學の生誕、五〇—五一頁)。

第二に古典經濟學におけるマルサスとリカアドの對立の問題である。普通にマルサス經濟學は地主階級の利益を代表したに對し、リカアド經濟學は産業資本家階級の利益を代表したといわれる。

古くベテンはマルサスを地主的、リカアドを商人的として大要次のように説いた。——マルサスとリカアドの理想は異なつた國民經濟の上に基礎づけられていた。イギリスにおいては當時新しい經濟が舊い經濟に置替えられていた。商業の中心地が重要となり、科學上の大發見が近代的生産への道を開きつつあり、驚異的な發明が急速に産業技術に革命をもたらしつつあつた。イギリスは從來農業上の理想によつて支配され、地主階級によつて左右された國であつた。今や商業上の理想が前面に現われ、そ

して政治力は農村より都市に移るに至つた。マルサスの郷里は農村にあつた。彼の教育は農業上の必要に彼を親しませた。リカアドと彼の先祖は都市居住者であつた。彼の教育と職業とは彼に商業上の慣習に親しませ、彼に商業界の理想を強調せしめた。アダムスミスは偏見も私心もなく世界の産業發展を研究した眞の哲學者であつたであらうが、マルサスとリカアドは彼等の時代の子であつた。彼等は各々彼等獨特の環境のうちで彼等の前提を見出した。彼等双方とも熱心なスミス學徒であつた。スミスの教義の彼等の説明は異なつていた。何となれば一方の住んでいた經濟世界は他方のそれと多くの重要な點で異つていたから。もとより彼等は各々みずからはイギリスとその經濟法則を説明していると考えたが、實は國民生活のある面のみを印象づけられており、先入觀と傳統の理想により色目鏡で見えていた。マルサスはリカアドよりも遙かによい觀察者であつた。彼の見た世界はリカアドの見た世界よりも遙かに眞實のイギリスに近かつた。彼はまた歴史の緻密な研究者であつて、彼はそれから眞實の人間が動きだす動機ならびに感情の正しい觀念を抜き出した。もしもフランス革命の觀念がよき古きイギリスの進路の安全を脅かすことがなかつたであらうならば、彼は人口について書かなかつたであらう。もしも地主の地代獲得權が問題とされなかつたならば、彼は地代の教義を展開しなかつたであらう。われわれはマルサスより、彼が生活する世界について推理する人の危険と感情と判斷の衝突する場合に彼が遭遇する困難とを、見取ることできる。しかるにリカアドにおいては、われわれは現實世界との接觸が僅かで、世界を彼の理想に對應せしめるに何らの困難を見出さなかつた人間を見出す。株式仲買人としての彼の成功は大であつたから、彼は彼が接觸する人々のよき判事であつたといふ意見を保證しえた。彼は彼等が利己心のみによつて動かされ、利潤の得られるときにはいつでも賣買することを見た。彼等はそれによつて一錢の儲けでもあれば、イギリスの敵に財産を賣することに躊躇しなかつた。リカアドの世界はロンドンであり、ロンドンにおいては人間と資本とは、ごく僅かな利益によつても一職業より他の職業に動かされた。彼が他の産業界をも彼自身の世界と同様に考えたのは當然である。しかもかく考えることにおいてリカアドは非難されるべきではない。彼はただ彼の時代に一般に使用されていたその原理に基づいて行動したのみである。リカアドの世界の經濟の單純性はその非現實性にかかわらず、經濟學者にとり極めて役に立つてゐる (S. N. Patten, *Malthus and Ricardo*, *Publications of American Economic Association*, Vol. IV, No. 5, 1883, pp. 26-30)。

なお大河内一男、經濟思想史、第五章第一、二節參照。

たしかに地代や穀物關稅問題などにおける兩者の理論はその通りである。しかしマルサス經濟學は單純に地主辯護論に終つたのであろうか。マルサスには獨特の需要論がある。これは當時リカアド理論に對抗した過少消費説の基礎理論となつたものであるが、現代のケインズの有效需要論の想源とされることにより、獨占資本主義時代の資本主義理論となるものである。マルサス・リカアド時代においても地主と資本家の對立は單純なものではなく、産業革命によつて生み出された資本主義社會は兩者の共通の基盤ともなつていた。この基盤の上における兩者の關係ならびにこれとマルサス・リカアド理論との關係は立入つて研究すべき重要な問題である。

第三に、ここに古典經濟學を一般的に扱うことはできないが、從來古典經濟學について行われた三つの理解とマルサス・リカアド問題との關連を指摘しておきたい。

一、古典經濟學が正統學派經濟學の名をもつて扱われる場合、これは「正統」ならざる「異端」の經濟學に對立せしめられているわけである。この意味では古典經濟學は社會に公認を得た經濟學である。これはリカアド經濟學であつた。十九世紀二、三十年代には澤山の異端的經濟學者が輩出してゐた。これらを詳細に研究したセリグマンは彼等の運命を適切に規定している。それによれば彼等の見解は支配學派の見解と一致しなかつた。當時の實際上の論點が極めて重要であつたから、その實際的需要と調和して學說を教えた經濟科學が間違いないものと認められたのである。實にイギリスの經濟學者は自由貿易にも産業發展にも責任がなかつたのである。現實の發展は經濟學が形成されるよりも早く進み、經濟學は支配階級の政策を補強するために利用されたのである。リカアドによつて建てられ、マカロックやミルによつて改良された建物ではなくて強固となり、安定的となり、批判や反對が突發しても動搖しなかつたのである。理論は讀まれず、讀まれない理論は實際の時代が耳をかす學說ではなかつた。結局、

時代の變るのを待たなければならぬか」といふことになる (C. R. A. Seligman, *On Some Neglected British Economists, 1903, in his "Essays in Economics, 1925"*, pp. 120-121)。

リカアド經濟學の社會公認性、正統性は時代の變化とともに變化する。リカアドの時代以後間もなく、イギリスの農場の地代は低下した。また西歐の進んだ國々の出生率は伸びなくなつた。リカアド經濟學はそれ自身間違いないとしても、そのままでは實際を説明するものではなくなつた。リカアドの産業進歩の法則は現實の實際に對して普遍妥當の公式とはならなくなつたのである (H. W. Peck, *Economic Thought and its Institutional Background, 1985*, pp. 188-189)。これは經濟學を學ぶ現代のわれわれにとつても大なる教訓を與えることである。今日、歴史的制約を離れた普遍妥當の純粹理論が研究されるが、これは研究者の意圖いかんにかかわらず、歴史的制約を免れえないといふことが、リカアドの古典理論の運命を學ぶものには明らかである。

それはともかくとして正統學派經濟學の意味での古典經濟學としてはリカアド經濟學は代表的なものである。しかしマルサスはその人口理論を別とすれば、ペーリイなどとともに異端者であり、修正者、批判者である。マルサス經濟學は販路説批判として當時も無視されはしなかつたが、今日ケインズ以後の經濟學との關連において十分に検討され評價されなければならぬであらう。

二、古典經濟學はマルグスの扱つたところでは俗流經濟學に對立せしめられている。この關係においては俗流經濟學が經濟の現象形態に囚われたに對し、古典經濟學は本質把握をなす經濟學である。言い換えれば價值論を基礎理論とするものである。この點ではリカアドは古典的でマルサスは俗流的である。もつともマルサスに古典經濟學からいつて掬すべきものが全然ないのではない。マルクスもマルサスに峻烈な批判を加え、彼は經濟學をリカアド、

スミスおよび重農學派以前におし戻そうとしていると評しながら、彼の研究が資本と賃労働との間の不等價交換に重點をおいたことをもつてその功績となしている (Marx, *Theorien über den Mehrwert*, III, SS. 34)。販路説の批判もシモン・デイのそれとともに重要であらう。

三、古典經濟學をもつて新しい經濟學、近代經濟學に對立するものとして理解する見解がある。これは今日廣く行われている見解である。この關係において新しい經濟學に特徴的なものとされているのは限界主義、價值論の否定、理論における歴史性の否定、手段としての經濟理論などである。これらの諸特徴は相互に關連する。古典經濟學の特徴として販路説を基礎理論とすることを特に重要視することもある。この點においてリカアドは古典的であるが、マルサスは近代적である。

以上、マルサス・リカアド經濟學は古典學派經濟學との關係において種々に位置づけられている。古典經濟學は一般に資本主義經濟の成初期ならびに繁榮期の理論であるが、リカアド經濟學はその内部事情を解剖し、その自由主義理論によつて資本主義の發展を促進するものであつた。それは社會主義經濟學の想源にすらなつたものである。もつともリカアドは理論をごく抽象的な形で展開し、そのために彼ならびに古典學派は經濟の歴史性を無視したとドイツ歴史學派から非難された。リカアドはたしかに經濟の歴史性を無視し、理論を普遍妥當的なものとして展開した。しかし彼は生きた現實を的確に分析することにより、資本主義經濟の歴史的本質を價值論を通じて理論的に把握したのである。マルクスもこの點を注意している。リカアドは過去に對する歴史的感覺に甚しく缺けていたが、しかしたしかに彼の時代の歴史的跳躍點のうちに生きてゐる、と述べてゐる (Marx, *Theorien über den Mehrwert*, III, S. 5)。この點はリカアドならびに古典學派の經濟學について今日特に反省しなければならぬところである。現代の

立場から理解し評價しなければならぬのはこの點である。

今日の經濟學はリカアド經濟學から種々なことを學ばんとしている。ハイエクの「リカアド效果論」は資本財と機械と勞働力の利用における代用的關係の變化が景氣變動の過程に及ぼす影響を追求するものである。これはハイエクみずからリカアドの名前を冠するように、リカアドの資本構成論に邁りうる着想であるが、彼の資本構成論は彼の價值修正論ならびに機械論に重要な關連を有するものであり、従來もリカアド研究において重要な問題とされたところである。

ハロッドのリカアドへの關心は一層重要である。彼は動態論の研究においてその想源をリカアドなどの古典經濟學のうちに求めた。従來古典經濟學はその大部分が靜態理論であるとされてきたが、ハロッドによればこれは誤りで、古典經濟學は彼の考える靜態的要素と動態的要素をほぼ等しい割合で含んでいる。ところがこの動態的要素は今日の新しい經濟學のうちには遺産として残らなかつた。それは靜態分析が限界概念と數學的表現によつて洗練され完成されたために、動態分析が失われたからである。しかしハロッドによるとリカアド經濟學でさえ動態的性格をもつている。彼の「經濟學原理」の序文のうちの、分配を左右する諸法則を確定することが經濟學の主要問題であるという有名な言葉は一般に分配の靜態理論を説くものとされているが、そうではない。何故かならばこの有名な言葉の前に次の重要な説明がある。曰く、「社會發達の段階の異なるに従つて地代、利潤および賃金なる名のもとに、これらの諸階級に割當てられる土地生産物の割合は大いに異なるであらう」と。この説明の後で前の有名な言葉を讀むならば、彼の分配論が動態的な意味を有することが明らかであるう、とハロッドは説いている(R. F. Harrod, *Towards a Dynamic Economics*, 1949, p. 15 f.)。これはハロッドの特殊な解釋でなく、リカアド經濟學を貫く産

業進歩の法則はまさに立派な動態理論である。

リカアド經濟學における進歩、動態的要素は、ハロッドの指摘を待たずまでもなく、リカアド研究史においては古くから指摘されてきた *progressive state* 例として A. Tombee, *Lectures on the Industrial Revolution*, (1920), p. 111, H. Borchers, *Das Abstraktionsproblem bei D. Ricardo*, 1929, SS. 7-9,

リカアドが「經濟學原理」第十一章、十分一税を論じたところで、社會の靜止狀態 (*stationary state*) と退歩狀態 (*retrograde state*) と進歩狀態 (*progressive state*) を區別して議論を進めつゝ、その興味あるところは *progressive state* である。 (D. Ricardo, *On the Principles of Political Economy*, ed. by P. Sraffa, p. 176 f.) また「穀物低價格の資本利潤に及ぼす影響」(一八一五)における推論も注意をさへ。参見 *The Works*, ed. by P. Sraffa, IV, p. 16 f.

現代の新しい經濟學は、マーシャル以後靜態論の研究に没頭するというよりも、限界分析による短期理論に没頭し、古典經濟學の動態的な、あるいはむしろ長期的な研究の遺産を忘れてしまった。それがハロッドなどにより今日反省を促されつつあるものであるが、その動態、長期理論は意識的たると無意識的たるとを問わず歴史的變化の理論につながるものであつて、リカアドなどの古典經濟學の研究の焦點もまた明らかであろう。

リカアド經濟學に對しマルサス經濟學は資本主義經濟の發展にとつて保守的性格を有する。これは地主所得の辯護とか富裕階級の購買力の意味づけなどに現われている。この理論は資本主義經濟を新しく形成し、さらに發展させるよりも、既に成立しているイギリス型の資本主義を守るところに重點がおかれていたように思われる。この性格のためにイギリス資本主義經濟が發展期にあつた十九世紀初頭において、マルサス經濟學が發展の波に乗つたリカアド經濟學の蔭にかくれたのであろう。そして長期停滯が問題とされる現代の成熟資本主義經濟において、このマルサス經濟學が高く評價されるのも理解されるようである。ことにこの經濟學が二十世紀前半の經濟學界に最大

の問題を投げたケインズによつて再評價されたことは興味深いところである。ケインズはそのマルサス論において販路説を斥け過少消費説を強調したリカアド宛のマルサスの手紙を掲げ、この手紙を熟讀するものはマルサスの到達点のほとんど全面的の抹殺と百年にわたるリカアド理論の完全な支配が經濟學の進歩にとり災難であつたという感なきをえないといひ、またリカアドの代りにマルサスのみが十九世紀經濟學の出發したる根幹であつたならば、世界は今日遙かに賢明で且つ豊かなところとなつていたろうにとの感慨を述べている(J. M. Keynes, *Essays in Biography*, 1933, pp. 140-141, p. 141)。マルクスはリカアドを極めて高く評價し、マルサスを非難してその研究が剽竊であること、その大部分がリカアドの著作の名聲に對する嫉妬に負うものだと酷評したが、ケインズはマルサスの經濟學を極めて高く評價し、リカアドは經濟學の進歩の妨害者だと罵倒した。リカアド對マルサスの問題は百餘年前の古典學派の問題にとどまらず現代の問題である。それは骨董いじりの問題でなく、新しく解決しなければならぬ理論經濟學の問題である。

(付記) 本稿は本年五月八日横濱國立大學において開かれた經濟學史學會第九回大會における共通研究論題による報告の草稿に若干の補注を加えたものである。